

釉裏金彩

釉裏金彩は、切り出した金箔片と金泥で文様を描く、比較的新しい陶磁器の下絵付け技法である。2001年に重要無形文化財に指定された。

金は17世紀頃から日本の陶磁器に用いられてきたが、上絵付けの技法が一般的で、表面に近い部分であるため、経年変化による摩耗に弱かった。1960年代初頭、石川県の陶芸家、竹田有恒（1888-1976）は下絵付けに金箔や絵の具を用いる、「釉裏金彩」と呼ばれる技法を開発した。この技法は、金箔を傷から守り、柔らかな光沢を与えるものである。

釉裏金彩は取り扱いを誤ると破れやシワが生じやすい繊細な金箔からデザインの一部を切り出るところから始まる。それをあらかじめ高温の釉薬で焼いた陶器に、薄い釉薬で丁寧に接着していく。さらに金泥や金粉を使ったり、針のような道具で金地に線を引きたりすることで、細部まで表現することができる。絵柄が乾いたら、最後に透明な釉薬を丁寧に塗り、低温で焼成すると、何層もの釉薬の間に金色の絵柄が挟まれた状態になる。

2001年に重要無形文化財保持者に認定された人間国宝の吉田美統（1932-）も、この「釉裏金彩」の技法で有名な石川県の作家である。